



Title	和歌
Author(s)	音代, 節雄
Citation	懷徳. 1938, 16, p. 50-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89006
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和歌

近詠五首

—小豆島にゆく—

高田保馬

支那の野に生命いくつか今日も散る瀬戸の入海こえて思ふも
つゆ晴れの瀬戸の入海さやかなれや海月も生命たのしみて居り
生命ありてかゝる御代にもあふものか南澳島も昨日落ちたり
ましろなる包みとなりて歸らずや丈夫として海はこえにき
粗朶そだならぶ兒島の海は瀉遠しはるばるにして人の動ける
(遺骨聯絡船にて高松にかへる)

幼な心

音代節雄

黄昏は神がくしありと聞かされて早く歸りぬ幼年の頃
一つ星見つけて明日あすの幸祈さちる幼な心の聖きよき度つづしみ

神戸地方の水禍を見る

あゝ惨たり濁水滔々街上を激たぎつ湍せなして流るゝ神戸
天地あめつちの猛威の前にひしがれし人間のわざのもろきはかなさ

水神の怒りにあひて忽ちに別荘地帯砂原となる

日本一の別荘地とぞたゝへられし芦屋住吉地價下るらし

銃後の片片

仲田應弘

摘出弾並べる中に左眼窩内の小銃弾は毀れてをらず

ミオトニン買ひたる青年將校は豫防具なども包ませてをり
たくましき乗馬の兵の通れるに正月に入りし君がまじれり

中谷正一君應召後、年貢滞納のゆゑに小作田を取上げらる

わが家は麥播ける頃と思ふべし戦へる補充特務兵の君

岡山先生御重態のよしをきゝて

上羽浅子

幾年も前に聴きたる講義なれ明瞭なるお聲の未だ耳底に

床前に詩作され居しお姿をあふぎ見たるは先頃のこと

或る日叔父の家にて詩の會ありて

席上の題早も出されしか人等むぎくゝの思ひにひたる

苦吟せる人等のそばを音たてずあたゝかき茶をわれは注ぎまはる